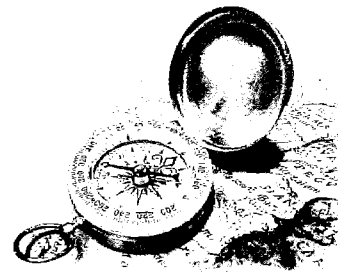


ロータリーコラム

第10回

2016-17年度ガバナー
刀根 莊兵衛



ロータリーにはなぜ高潔性 Integrity が必要?

ロータリー戦略計画のなかの中核的価値観（組織の考え方と方向性を定める原動力であり、戦略計画においても重視される要素）の一つが高潔性（Integrity）と呼ばれている価値観です。RIの説明によれば、ロータリーにおける高潔性（Integrity）の具体的姿は次のように説明されています。

- ・活動の結果や目標達成において自らの責任を果たす意識を貫くこと。
- ・仕事や人間関係において、常に倫理と職業の高い水準を固く守っていくこと。
- ・公平さと尊敬の念を持って他人と接し、託されたリソースを良心に従って管理すること。

つまり、高潔性をもって約束を守り抜き、倫理を守ると言う意味で使われています。

このインテグリティ（integrity）については、なかなかピッタリとした日本語訳がないといわれています。英語の本来の意味はオックスフォード英英辞典によれば the quality of being honest and having strong moral principles（誠実であるとともに強固な倫理原則を維持できている状態）ということで、正直とか誠実とかよりワンランク上の状態を言うとのことのように思われます。東海大学の外国語教授 田草川弘氏によればインテグリティというのは特別な言葉だそうです。米国ではインテグリティがあると言えば最高の褒め言葉になります。逆にインテグリティを喪失したといえ、それは人格の全否定になる。インテグリティとは、いかなる権力や圧力にも^{つら}屈しな道義心の堅固さ、この人ならばと人格的に全幅の信頼を集める内面的な強

靱さ、したたかさ、行動力と実績を意味するとのことです。

もっと平たく言えば、「倫理的な原理原則がしっかりして、強いものから言われたからと言って自分の立場を変えない。また自分の利益になるからと言って、いい加減なウソはつかない。ポジショントークはしない。」そうした人間の事をインテグリティのある人と言って、人格的に最高の評価を与えることになるそうです。

一言で言えば、「誠実で何事も 首尾一貫していること」と言うことだろうと思います。

具体的には、

- ・個人としての行動の中に高い倫理基準が貫かれている
- ・いつも真摯に努力している
- ・信用を守る
- ・人に対してオープンであり、正直である
- ・人に対してフェアに接する
- ・決めたことをきちんと実行し、途中で逃げない
- ・人から信用される

と言うようなところでしょうか。何か四つのテストとも相通ずるところもありそうです。これは東洋、西洋かかわらず人として一番大切なところだろうと思います。

私はこのような高潔性といわれる概念こそ、実は、日本人が昔から最も大切にしていた伝統的な価値観であり、人生の目標としてきた品格のある高尚な生き方ではないかと考えています。仏教の信仰などに基づいて、見えぬ存在を畏れ自ら省みて恥じる行為

はしないという己の内なる律を持った誠実で高尚な生き方ではないかと思えます。大事なものは他人の目ではなく、己の心の律なのです。たとえ誰一人知る者はなくとも、己ひとり心を省みて疾しいことをすれば、もはや己はダメになったのだとする心持こそ、彼らがもっとも大切にされたものでした。バレなければ法を犯してもどんな汚い金でも平気で手に入れようとする輩とは、まるで心がけが違っていました。

ここで日本の根底に流れる文化や精神を振り返ってみましょう。

現代の日本人はとかく金銭欲、物欲、所有欲が旺盛で、物質万能社会になり下がったような気が致しますが、日本文化はもともとそういう欲望とは全く無縁な、むしろそれらの欲望の否定の上に成り立ってきたものだったのです。物欲にとられることを軽蔑し、欲望を精神の自由を阻害する敵と見做して、欲望を超越したところに高度な精神文化を作り上げてきました。

たとえば、日本の古典 - 西行、兼好、光悦、芭蕉、池大雅、良寛などを少し紐解けば、日本には物作りと金儲けとか、現世の富貴や栄達を追求する者ばかりでなく、それ以外にひたすら心の世界を重んじる文化伝統があります。詩人ワーズワースの「低く暮らし、高く思う」という詩句のように、現世での生存は能うかぎり簡素にして心風雅の世界に遊ばせることを、人間として最も高尚な生き方とする文化伝統がありました。

光悦の母、本阿弥妙秀は生き方の原理として、他に貧しいものが大勢いる中に己一人が多く物を所有することを悪と感じていました。その所有に対する哲学は、

- ・人間が生きていくためにはいったい何が必要で必要でないかを徹底して省察していた。
- ・世間ではともすれば金銀でも持物でも多く所有すればするほど人は幸福になると信じているようだが、むしろ逆で、所有が多ければ多いほど人は心の自由を失う。

ということでした。

本阿弥家は足利尊氏の頃から代々刀の目利き、研ぎ、磨きを家業としてきた一族でありましたが、その家業の心得の上でも、このような哲学が貫かれて

いました。また、『本阿弥行状記』には、光温の祖父で名人の光徳のそれは、光徳が徳川家康からその秘蔵する正宗の脇差を見せられたときのエピソードを伝えています。これには足利尊氏の直筆の添状まで付いており、家康のかねての自慢の品でした。しかし、光徳は御前でその刀をよくよく見ると、刀は焼き直して到底使いものにはならない。そこで、正直に見たてを申し上げたところ、家康大變立腹し、二度と召し出されることはなかったと言うことでした。

どんな権力者の前であっても、心にもないことを言うくらいなら死んだほうがましと言って憚らない、刀の目利きかけては絶対の自信と誇りを持っていたと言う光徳の強い信念であったものと思われまます。『本阿弥行状記』にはこのエピソードの後、どれほど諂いのない者であろうと、上様が御秘蔵の刀を承っているのに、しかも御前にて拝謁して、何の用にも立たぬ刀でございますと答えるほど潔い人はめったにいないだろうと、わざわざ解説まで付けています。このように本阿弥一族にとっては何よりも大事なことは自己に対する誠実であって、それを重んじるあまりに社会に対する姿勢は時にこういう愚直と言っていいほどの剛直さとなって表れたことが分かります。天命を恐れる心がまずあって、その見えぬ存在を恐れる故にわが心に叶わぬ非道は決して行わず、自らの律に従って生きてきた。それゆえに、本阿弥の目利きはよそでは考えられないくらい厳格なのだという信念なのでしょう。

また、日本には『もったいない』という言葉があります。今では死語になりつつなるのかもしれませんが、昔私たちは両親からそのような教えを受けて育ちました。

『もったいない』とは表面上はものを粗末にするなどということですが、単に儉約せよと言うのではなく、もっと深い「神仏に対する不屈きである、畏れ多い」という意味が込められています。食物ならたとえ米の一粒、菜の一切れでも、十分にその用を果たせないで無駄にすることは、命を冒瀆する行為、天に対する畏れ多い行為だということです。

その家や国にいくらお金があるからといって、食糧や木材や石油・ガスなど、他に貧しくて買えぬ国家や家があるのに、目いっぱい買い集めて空しく浪費する風潮は、それ自体が罪深い行為と感じます。

所有の欲望から自己を解放することが、かえってわれわれの心を自由にし、豊かなものにするには、これまた幾多の文人たちの霊においてみてきたところ。彼らは権力とか富貴とかよりもはるかに高い価値として人間の品位というものがあることを身をもって示しています。脱俗が高雅な心に至る前提である欲望から、自由になることが人をいのちへと導くことを示しています。

最後に、高潔性と関連してノーブレス・オブリッジ (Noblesse Oblige) (優者の責任) という言葉を挙げてみたいと思います。力や富、地位を持つ者は、それを持たない弱者を救う責任を果たしてこそ『選ばれた者』として称賛され、矜持 (きょうじ、自分の力を信じていただく誇り) つまり自信とプライドを持てるという意味だそうです。一言で言えば、高い身分に伴う道義上の義務であるということになります。

また、フィリップメイソン「英国の紳士」にも本阿弥一族の信念と重なることが書かれています。

『英国紳士にとって、名誉は紳士に欠くべからざるものであるが、名誉とは、ただ世間の評判のことでなく、自尊心を——従って高潔、無欠、自足——を意味し、金は軽蔑すべきものと考えていたのだ』

日本人は昔から心の世界を重んじる文化伝統、高潔性が溢れていました。見えぬ存在を、畏れ自ら省みて恥じる行為はしないという己の内なる律を持った誠実で高尚な生き方をしてきました。しかし、このような長い文化の伝統を持つ国が、戦後アメリカ型産業社会に方向転換し、欧米並みの大量生産大量消費社会になってしまい、古来からの日本人の心を失いかけているのが現実の姿ではないかと思えます。今日、戦後の世界を支えたアメリカ型の市場経済、その恩恵にあずかってきた日本の産業体制、輸出大国 (貿易立国) などが大きな変革期に差し掛かろうとしております。これから本当に21世紀の新しい時代、大変な時代に突入するのかもしれませんが、別の見方をすれば、日本が昔から持っていた文化伝統 (高潔性、誠実性、清貧等の徳目) を取り戻すチャンスとなるのかもしれませんが。

ロータリアンは今こそ、日本人の希望と夢を呼び起こすエリートとして、高潔性を自覚し、ノーブレス・オブリッジを果たすべきではないでしょうか。

私の尊敬する西村二郎パストガバナー (京都南RC) はかつて『ロータリアンはエリートでなければならぬ、そして誇りを持って行動しなければならない』と言われました。「エリート」や「選良」とは、率先垂範すべき「貴き身分」(ノーブレス) の者を言うことは言うまでもありません。

戦後、日本の教育は間違った極端な結果平等主義に陥り、『みんなとおなじ』、『普通並』という生き方が最上の基準として教え込まれてきました。そして、この偏った教育のために、社会の指導的立場の人間においてさえも、『選ばれた者』としての自覚を持ち、そしてその責任を果たそうとする考えが欠落してしまったように思われます。また、そのような物質万能の人にとって一番大切な価値観はお金や地位と言うことになると思います。

バブル崩壊後二十年。社会は大きく変わり、今では格差社会が進行していると言われ、勝ち組・負け組、上流社会・下流社会などと言う言葉が流行語となっています。こうした言葉が流行語となるのも、マスコミのせいもありかもしれませんが、戦後の結果平等教育が日本人にしみ付き、そのせいで勝ち組・負け組、上流社会・下流社会などと言う言葉に過敏になっている面もあると思います。『選ばれた者』の意識のない社会ではお金がすべてであり、「高潔性」や「高い志」などといったものは忘れ去られているのではないのでしょうか。

現在の日本は、ますます将来への不安と絶望感に苛まれているように思います。そして、誇りと自覚を持って社会に模範を示すことがロータリアンのあるべき姿であり、それがロータリーの魅力に繋がっていくのではないかと思います。私たち日本人が本来持っている豊かな文化性としての『高潔性 (誠実性・清貧)』をもう一度見つめ直しては如何でしょうか。

足るを知らば貧といえども富と名づくるべし、

財ありとも欲多ければこれを貧と名づく

『往生要集』

(引用文献：中野孝次 清貧の思想)